報告　日本転倒予防学会 第 2 回学術集会（京都）

～転倒予防の未来をつかむ～

・会　長：萩野浩（鳥取大学医学部保健学科教授／附属病院リハビリテーション部部長）
・副会長：原田敦（国立長寿医療研究センター病院長／第 3 回会長）
・日　時：2015 年 10 月 10（土）18 時～ 21 時，11 日（日）9 時～ 17 時
・会　場：京都テルサ（京都府京都市南区東九条下殿田町 70 番地）

10 月 11 日の朝は小雨が降っている中，715 名の参加者があった。参加者職種は，人数の多い順に，看護師，理学療法士，医師，研究者，作業療法士，介護・福祉関係者，企業関係者，運動指導者，報道・出版機関，薬剤師，トレーナーなど，多岐にわたっていた。
以下，セッションごとに報告する。

●イブニングセミナー・情報交換会

座長：橋口知（鹿児島大学）

10 月 10 日の前日にイブニングセミナーが開催された。「多職種で取り組む転倒・骨折予防」について，**鈴木みずえ本学会副理事長（浜松医科大学）**から認知症高齢者の転倒予防に関して本人の視点からの転倒につながる危険を分析した。**澤口毅氏（富山市民病院）**は大腿骨近位部骨折に関する多職種連携アプローチに関して富山市民病院の実践を紹介し，受傷後短時間で手術をすることが術後の予後を改善していることを報告した。その後の情報交換会では，保健・医療・福祉・工学，産業などさまざまな職種の参加者による活発かつ積極的な意見交換が行われた。

鈴木みずえ氏

澤口毅氏

●学術集会会長挨拶

挨拶：
萩野浩 第 2 回学術集会会長

第 2 回学術集会会長である萩野浩氏（鳥取大学）からは「第 2 回学術集会はメインテーマが〔転倒予防の未来をつかむ〕であるが，これは未来を先取りした飛躍を期待した内容であり，参加者には転倒予防の未来をつかんでお帰りいただきたい。本学術集会は鳥取大学基礎看護学講座，リハビリテーション部，日本転倒予防学会事務局などの協力を得て学会運営がなされている。特別講演は京都開催ということから舞踊家，井上八千代様に〔京舞における所作と身体〕を依頼した。その後人間国宝と認定され，本学会でも記念となる講演となるであろう。」と挨拶がなされた。

●特別講演

座長：萩野浩（鳥取大学医学部／附属病院リハビリテーション部）
京舞における所作と身体　井上八千代氏（舞踊家　京舞井上流五世家元）

1999 年，日本芸術院賞受賞，2000 年，五世家元として「五代目井上八千代」を襲名，2013 年，紫綬褒章受章，日本藝術院会員に選ばれる。2015 年，重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定。講演テーマは「京舞における所作と身体」。所作と呼吸などのバランスから転倒予防につながる。京舞は体力維持も重要であるが，歩くことで日々のコンディションがわかり，足の指はついているのかは舞の中でも重要である。京舞の舞には身体の体力の維持が重要であり，ちょっとした体調不良でも舞台の奈落に落ちた時がある。実際の京舞の実技も交えて，所作と身体のバランスの重要性が述べられた。武藤理事長から，井上氏のつま先立ち，スクワットなど全身で表現し，京舞は芸術身体運動であることが強調された。萩野会長からは地に足をつける，足座るなどの動作の重要性を再認識したと意見が述べられた。

井上八千代

●シンポジウム

転倒を来す疾患・障害の臨床像と転倒予防対策　座長：鈴木隆雄（桜美林大学加齢・発達研究所／国立長寿医療研究センター），奥泉宏康（長野県東御市立みまき温泉診療所）

座長：鈴木隆雄氏と奥泉宏康氏

「特発性正常圧水頭症の症状と治療―我が国の多施設共同ランダム化比較試験―」と題して，**石川正恒氏（音羽病院）**は「特発性正常圧水頭症患者は小刻み歩行，物忘れ，尿失禁の3症状を示し，多施設比較研究では転倒は88%，骨折は25%起こしている。脳室腹腔シャント術を行い，運動プログラムなどにより転倒リスクは改善した」と報告した。「前立腺疾患と転倒」と題して，**赤倉功一郎氏（JCHO 東京新宿メディカルセンター）**は「夜間転倒の原因として夜間頻尿などがあるために，排尿日誌をつけてアプローチすることが有効である。前立腺がんでは排尿障害，ホルモン療法，骨転移などに関連して転倒を引き起こしている。」と発表した。「神経難病と転倒―特に進行核上性麻痺（PSP）を中心に―」と題して，**饗場郁子氏（東名古屋病院）**からは「PSPの核上性麻痺は眼球のマヒが典型的であり，前頭葉の障害があり，転倒時に手が出ない，臥床していてもベッドから転倒しやすいなどの傾向があるために約10倍転倒しやすい。排泄に絡んで何度も転び，パーキンソン病も転倒が多い。患者・家族の転倒予防講座参加により理解を深め，危険度チェックをしてセルフケアを促進し，転倒予防川柳やクイズなどスタッフも楽しんで行う研修も有効である。」ことが報告された。「転倒に注意すべき薬剤―睡眠薬を中心として―」と題して，**大谷道輝氏（東京逓信病院）**からは「6種類以上の多剤併用は転倒のリスクとなり，ベンゾジアゼピン系の睡眠薬は転倒しやすい。アモバンなど非ベンゾジアゼピン系短時間作用型でも，高齢者では作用時間は延長するので薬剤効果が4倍くらい表れる傾向がある。特に，デパスは筋弛緩作用が強いため，投薬に注意する必要がある。非ベンゾジアゼピン系睡眠薬に切り替えたところ，転倒が減少し，転倒後に頭部CTを撮る患者が減少した。」と報告した。「糖尿病と転倒」と題して，**荒木厚氏（東京都健康長寿医療センター）**は「糖尿病患者はそうでない人に比べて転倒しやすく，特にHbA1c 8%以上と6%未満で転倒しやすく，治療中の患者は低血糖で転倒している可能性が高い。また，糖尿病患者はサルコペニアやフレイルになりやすいので，バランストレーニングや下肢のトレーニング，環境の整備が必要である。」と発表した。「栄養と転倒」と題して，**山田実氏（筑波大学大学院）**は「高齢者はサルコペニアの影響により，転倒が多くなる。筋力を増強するためにタンパクの合成を促進することが重要であるので，タンパク質，BCAA，ビタミンDを摂取することが望ましい。栄養だけでなく運動を同時に行うことで骨格筋が有意に増加する。特に，フレイルやサルコペニアの高齢者には栄養補助による影響が大きい。サルコペニアの場合には血中ビタミンD濃度が低下し，補給により転倒が減少している。」と発表した。

シンポジウムの模様

討議では，PSPには外傷が多いこと，夜間頻尿など転倒のリスクが高い患者には保護帽子を使用していること，多職種連携や転倒予防マネージャーの導入などについても紹介された。

石川正恒氏

赤倉功一郎氏

饗場郁子氏

大谷道輝氏

荒木厚氏

山田実氏

●パネルディスカッション1

認知症高齢者の転倒予防　座長：島田裕之（国立長寿医療研究センター），鈴木みずえ（浜松医科大学）

座長：島田裕之氏と鈴木みずえ氏

「急性期病院における認知症高齢者の転倒予防に関する看護アプローチ」と題して，**高原昭氏（北播磨総合医療センター）**は急性期病院における認知症高齢者とせん妄状態の違いなどからのアプローチ方法の必要性などを発表した。「高齢者施設における認知症高齢者の転倒・転落事故の特徴と予防」と題して，**河野禎之氏（筑波大学）**は，施設における認知症高齢者の重症度別の転倒の状況から，重症度が高い場合はベッド周辺，軽度～中度では昼間に転倒が起こるために重症度別のアプローチの必要性を発表した。「認知症の転倒と日常生活活動・行動障害との関係―転倒の予測と介入方法について―」と題して，**岡村太郎氏（千葉県立保健医療大学）**は，行動障害と転倒の関係を明らかにし，運動プログラムや注意喚起などを促すプログラムや茶話会などの介入研究を実施し，短期間の集中研究であるが，有意に転倒が減少していたことを明らかにした。「介護施設における認知症高齢者の排泄に関する転倒予防」と題して，**平松和子氏（金沢医科大学）**は，排泄時における転倒の特徴と排泄障害に関係したアプローチの重要性を強調し，転倒予防の排泄予防の指標などを開発し，今後さらに研究を継続することなど発表した。「認知症高齢者の転倒を防ぐセーフティマネジメント」と題して，**小松泰喜氏（東京工科大学）**は，認知症高齢者の特徴や高照射療法の睡眠や転倒予防への効果などを明らかにした。

認知症高齢者の転倒は加齢による身体機能の低下や認知症の疾患，環境や人間関係など，複雑な状況であることが明らかになった。転倒予防に関する多職種の連携などにおいては，情報の共有，ケアプランの共有，意欲の維持などの必要性が検討された。

高原昭氏

河野禎之氏

岡村太郎氏

平松知子氏

小松泰喜氏

●パネルディスカッション2

転倒予防のためのハード開発　座長：山本創太（芝浦工業大学），上岡洋晴（東京農業大学）

座長：山本創太氏と上岡洋晴氏

「ヒッププロテクタの力学性能評価システム開発」と題して，**田中英一氏（東海職業能力開発大学校）**は転倒を模擬するコンピューターシミュレーションや日本人高齢女性の大腿部を模擬した大腿部モデルを開発し，衝撃試験を行うことでヒッププロテクタの開発を行っていることを発表した。「滑り転倒事故は自己責任か？―バリアフリー新法改訂！床面滑り抵抗係数（C.S.R）が転倒事故を変える！」と題して，**清水雅雄氏（防滑業振興協会）**は，平成 24 年度のバリアフリー新法において「床の滑り」に関する条例が追加され，滑り抵抗係数（C.S.R）を用い，C.S.R. 測定値が 0.4 以上と明記され測定器を用いた管理が必要となり，滑りに対する法律を周知徹底することの必要性を発表した。「医療従事者の経験則を考慮した知的な転倒予防システム」と題して，**櫛田大輔氏（鳥取大学大学院）**は，医療者がベッド上の患者の姿勢や危険を察知して注意勧告するシステムやロコモ診断として歩行を感知するシステムを開発し，その有効性について発表した。「つまずきによる転倒の予防を目的としたロボットの開発」と題して，**高杉紳一郎氏（佐賀整肢学園子供発達医療センター）**は「つま先＋もも上げ」を自然に促すリフトオフ運動を開発し，その有効性について発表した。

本学会ではソフトの開発が中心となっているが，今回のように，転倒予防のための機器（トレーニングマシーン，感知器）やサーフェイス，転倒した際に衝撃を緩和するインスツルメント（ヒッププロテクター）といったハードの

研究がもっと進むことが望まれる。時間がかかるハード開発に対して，現場での声，つまりフィージビリティのあるものに仕上げるための意見を出していくことが重要であり，双方（ハード開発側，ユーザーたる臨床側）に意義ある議論ができ，次回以降もハードのシンポジウムやワークショップなどを設けることが期待される。

田中英一氏

清水雅雄氏

高杉紳一郎氏

櫛田大輔氏

パネルディスカッション２の模様

●ワークショップ

転倒予防チームを作る　座長：岡田真平（身体教育医学研究所），大高洋平（慶應義塾大学）

「転倒予防チームを始める―急性期病院の看護師の立場から―」と題して，**米山久美子氏（鳥取大学医学部附属病院）**は，鳥取大学附属病院において未然防止と再発防止の両面から精力的に取り組んでいる多職種の転倒予防チームによるラウンド，カンファレンス等の活動と，チームにおいて看護師が担うべき役割を報告した。「急性期病院での転倒予防対策チーム―療法士として―」と題して，**平井覚氏（松山市民病院）**は，多職種チームでの多角的な転倒事故分析をすることで新たな問題の発見や医療全体の質の向上につながることや，狭義の転倒予防チームだけでなく広義のチーム＝院内全体で取り組むことの重要性を発表した。「チームで取り組む回復期リハ病棟での転倒転落対策」と題して，**松浦大輔氏（東京湾岸リハビリテーション病院）**は，医療安全対策委員会内の転倒転落ワーキンググループと各病棟のリスクマネージャーとの連携は転倒・転落の数を減少させるためではなく，スタッフが安心して医療に取り組める仕組みを整備し，現場を後方的にサポートすることにつながると発表した。「認知症高齢者が，立つこと，転ぶこと―当施設におけるヒヤリハット検証と認知症の方への関わりについて―」と題して，**及川智司氏（北上きぼう苑）**は，老健での事故防止委員会による転倒予防の取り組みの紹介と，介護福祉士の立場から，入所者の“今”これがしたいという気持ちに寄り添い，それが何かを見つめることが大切であると述べた。「地域ぐるみの運動普及を通じた転倒・介護予防」と題して，**北湯口純氏（身体教育医学研究所うんなん）**は，「コミュニティ・ワイド・キャンペーン」は地域レベルで身体活動を促進するための多機関協働による複合的アプローチであり，地域組織や地域住民との信頼・連携関係を構築することが重要であると発表した。

急性期，回復期，施設そして地域における転倒予防の取り組みは一人で行えるものではない，ということが多職種の立場から述べられるとともに，チームアプローチの必要性と重要性，エビデンスも含めて興味深い討議がなされた。

米山久美子氏

平井覚氏

松浦大輔氏

及川智司氏

北湯口純氏

●スポンサードセミナー

不眠症と転倒・骨折　座長：高杉紳一郎（佐賀整肢学園こども発達医療センター）

「高齢者の不眠・転倒・骨折」と題して，**宗圓聰氏（近畿大学医学部奈良病院）**は骨折を予防するための薬剤治療の有効性などを発表した。「天然型ビタミンＤの補給は転倒予防につながるという研究報告はあるが，日本では認可されていない。脊椎の圧迫骨折などの最初の転倒を予防することが重要であり，骨量を上げることとして，骨粗鬆症薬の有効性が認められているが，日本人の転倒骨折は年々増加している」

宗圓聰氏

伊藤洋氏

ことなど発表した。「不眠症治療とオレキシン受容体拮抗薬」と題して，**伊藤洋氏**（**東**京慈恵会医科大学葛飾医療センター）は「睡眠薬の服用の際に副作用のふらつきなどで転倒しやすく，睡眠障害そのものが転倒のリスクである。薬剤の筋弛緩作用が影響しているが，オレキシン受容体拮抗薬などふらつきが少ない薬剤もある」と発表した。

●ランチョンセミナー

1.　座長：原田敦（国立長寿医療研究センター）

座長：原田敦氏

鈴木隆雄氏

「転倒予防とビタミン D」と題して，**鈴木隆雄氏（桜美林大学加齢・発達研究所 / 国立長寿医療研究センター）**は「血清ビタミン D 濃度（25-OH-D）が少ないと転倒しやすいことが明らかになった。食事から接種する必要があるが，日本食事摂取基準 5 μg/day，他国は 20 μg/day であり，他国より少ない。活性型ビタミン D_3 剤では代表的なものにエルデカルシトールなどがある。エルデカルシトールは，前腕骨の骨折を減少させている。椅子からの立ち上がりの時間が短くなるなど筋力の強化につながる。吸収させたカルシウムの強化だけではなく，筋肉を強化したり，25-OH-D 血中濃度が 40nmol/l 以上ある人は冠動脈や呼吸器疾患，2 型糖尿病を抑制する働きをする。認知症，認知機能の低下，脳卒中，死亡率との関係も指摘されている。」と発表した。

2.　座長：武藤芳照（日体大総合研究所／日本体育大学保健医療学部／日本転倒予防学会理事長）

座長：武藤芳照氏

日高滋紀氏

「骨粗鬆症診療における転倒予防の重要性」と題して，**日高滋紀氏（日高整形外科病院）**は，骨粗鬆症患者に対する運動療法の効果は効果判定のエンドポイントをどこにおくかで結果が異なり，個人の歩行状況などのパフォーマンス（活動レベル）での評価をすることが可能であることを発表した。

■一般演題発表（口演，ポスター）

●一般口演

☆一般口演―1：リスクアセスメントシートの活用　座長：征矢野あや子（佐久大学）

病院におけるアセスメントシートの開発，離床センサーや工夫が発表された。**勝元晴香氏（ジャパンメディカルアライアンス東埼玉総合病院）**は転倒転落アセスメントシートにより，夜間に自分 1 名で排泄に行くことが転倒・転落に結びついていたことが明らかになったと発表した。**山崎慎治氏（鳥取大学大学院）**は，アセスメントスコアシートのデータの遺伝プログラミングを用いて数式モデルを用いて熟練看護師の判断モデルから抽出を行い，「インスリン・血糖下降剤」により転倒リスクが上昇すると判断していることを推測した。**山本典代氏（聖隷浜松病院）**は外来患者の転倒・転落リスクアセスメントを実施して，今後，職員教育の必要性を発表し，**武田万耶氏（北出病院）**は，離床センサーを導入した転倒・転落予防の効果として転倒リスクアセスメントシートのハイリスクの高い人は対応が早いが，リスクが中程度である場合，転倒を起こしやすい状況にあったことを明らかにした。**多門寺さつき氏（呉共済病院）**は転倒転落 MAP を作成し，転倒のハイリスクの危険度Ⅲの患者に注目して対策強化を発表した。従来の転倒・転落リスクアセスメントシートによる転倒の危険度Ⅱ，Ⅲが転倒の発生と関連していないため，項目精選，独自の配点，加点式からフローシート形式にするなどの工夫が報告された。また，外来患者向けのアセスメントと危険度を周知する方法や熟練看護師が転倒リスクの中の特にどれに注目するのかについて工学分野の知見を活かした研究も報告された。アセスメントの結果を離床センサーなどの対策とどうつなげるかなど，たいへん活発な討議が行われた。

☆一般口演―２：病院内における転倒事故の実際　座長：立川厚太郎（新潟県身体障害団体連合会理事長），森田光生（慶友整形外科病院／慶友転倒骨折予防医学センター）

伊勢真人氏（呉共済病院）は，院内転倒による大腿骨近位部骨折患者の大腿骨近位部骨密度と血中ビタミンＤ濃度の関係を分析したが，有意な関係は認められなかった。**射場靖弘氏（鳥取大学医学部附属病院）**は，脳梗塞急性期での転倒発生因子は，脳幹梗塞とナースコール不使用エピソードであり，中でもナースコール不使用はオッズ比が高いので環境的な取り組みが必要であることを発表した。**山根由紀氏（北出病院）**は，病室における環境状況を整えることで転倒，転落を予防しようとする試みで，独自の環境チェックシートは興味深いものであった。**石田亮介氏（函館脳神経外科病院）**は，インシデント報告から障害重症度を予測できるかをテーマに発表した。**内山早苗氏（県立安芸津病院）**は，離床時間の拡大や廃用予防をテーマに「院内デイケア」を転倒予防の取り組みとして解釈し発表したことに新奇性がみられた。一方で，月２回 45 分の取り組みであることや，日勤帯の看護師が対応していることなど効果検討に至っていないが，「院内デイケア」を取り組んでみようと思った人は少ないと感じる。**川北整氏（石川県立済生会金沢病院）**は，症例の認知，性格などの個人因子によって転倒予防は困難であるので，転倒時の外傷を軽減する方向に取り組みをシフトし，取り組みはマットのみの対処法で果たしてリスク管理はなされた。認知症などコンプライアンスの悪い症例への対応は臨床では大いに苦慮されるが，ヒッププロテクターなどエビデンスのある環境調整など参考となる発表であった。

☆一般口演―３：新しい転倒リスク評価　座長：上内哲男（JCHO 東京山手メディカルセンター），二瓶美里（東京大学大学院）

一般口演 -3 の模様

徳永孝典氏（緑栄会）は，TUG をもとに通所介護施設における障害物またぎ歩行テストと転倒の関連を明らかにした。**今井英輝氏（オフィスルースト）**は片脚タッピング動作の転倒リスクの一指標としての有効性について発表した。**加藤啓祐氏（慶友整形外科病院転倒骨折予防医学センター）**は包括バランス評価である BESTTest を用いて，Mini-BESTest,Brief-BESTest の得点を求め，３つの評価と転倒との関係を分析し，短縮版の結果も良好であり，地域の転倒リスクを行う際に有効であることを発表した。**冨永琢也氏（塩原温泉病院）**は，新しいトレーニング法として，FAST を開発したが，その後二重課題を付加した D-FAST を開発し，その有効性を発表した。**佐久間菜月氏（東京大学）**は，手動車椅子使用時の転倒・転落シミュレーションを発表した。**辰田明紀氏（洛和デイセンターイリオス）**は，転倒恐怖心を持つ事例に対する評価治療に関して成功体験をすることで転倒恐怖心が軽減することを明らかにした。

☆一般口演―４：多職種連携　座長：菅栄一（整形外科・皮膚科クリニック）

村山拓也氏（新潟リハビリテーション病院）は，大腿骨近位部骨折の転倒予防における二次骨折予防を目指した多職種連携チームでの作業療法士の取り組みを発表した。**中村裕樹氏（八反丸リハビリテーション病院）**は転倒・転落ハイリスク患者の情報共有について，看護職とリハビリテーション職の合同申し送りを活用し，有効であることを発表した。**大木啓子氏（足利赤十字病院）**は，多職種で取り組んだ回復期リハビリテーション病棟における転倒予防の実践，多職種でカンファレンスを実施し，対策を検討した結果，転倒数が減少したことを発表した。**高木志仁氏（八尾総合病院）**は，回復期リハビリテーション病棟における看護師・リハビリテーション職で転倒予防の勉強会を実施することで，転倒が減少したと発表した。**森下奈美氏（市立伊丹病院）**は医師，看護師，理学療法士，薬剤師などの多職種における転倒予防チームによる防げる転倒を減らす試みと成果を発表した。

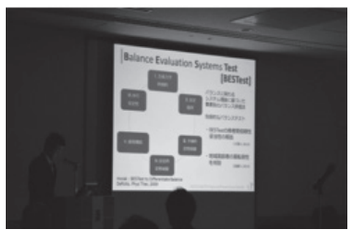
☆一般口演―５：生活期における転倒予防介入Ⅰ　座長：渡邉洋（渡辺整形外科），泉キヨ子（帝京科学大学）

松本浩実氏（鳥取大学医学部附属病院）はロコモティブシンドロームの重症度と転倒，低骨密度との関係を明らかにし，ロコモティブシンドロームになると転倒の頻度が高くなることを発表した。**和田崇氏（鳥取大学医学部附属病院）**は運動器疾患を有する高齢者における転倒関連因子を検討し，腰部疾患，変形性膝関節症の診断歴のある高齢者は転倒発生リスクが上昇していたと発表した。**伊井公一氏（赤岩病院）**は転倒低リスク高齢者の転倒有無による「起立 - 歩

行課題」と「歩行課題」の違いを，**北潔氏（北整形外科）**は骨脆弱性骨折の危険因子について発表した。**福島斉氏（東京都立多摩総合医療センター）**は，高齢者大腿骨近位部骨折の転倒状況調査においてバリアフリーの徹底化では運動機能の低下を引き起こしている可能性を発表した。**小林恵理（鳥取大学医学部附属病院）**は，変形性膝関節症患者における足部形態と転倒との関係について発表した。

☆一般口演―6：生活期における転倒予防介入Ⅱ　菅義行（菅整形外科医院），桂川保彦（帝京平成大学）

今岡真和氏（大阪府立大学大学院）は，入所者の居室の違いが転倒リスクと血中ビタミンＤである 25（OH）Ｄに与える影響を発表した。**小嶌康介氏（西大和リハビリテーション病院）**は，要介護者の転倒および骨折の実態は健常者よりも割合が高いことを発表した。**後藤悠人氏（東京湾岸リハビリテーション病院）**は，生活期脳卒中患者における転倒発生の実態調査を，**永田泰浩氏（北海道開発技術センター）**は，冬期道路における自己転倒による救急搬送者を分析し，発表した。**谷津祥一氏（順天堂大学）**は,「ノルディックウォーキングによる転倒予防」と題し，下肢筋力に着目して発表した。**村山俊樹氏（慶友整形外科病院）**は，「地域在住高齢者の転倒発生に関連する動的バランスシステム：前向きコホート研究」と題して，動的バランスから転倒予測が可能であることを発表した。



一般口演 -6 の模様

●ポスター

☆ポスター 1：地域社会における転倒予防介入　座長：梅原里実（JCHO 湯河原病院）

森田光生氏（慶友整形外科病院）は，地域在住高齢者における日常の恐怖のなかでの転倒恐怖の位置づけについて報告した。**池渕紘旭氏（いなもち医院）**は，転倒予防のための「自助」活動支援運動介入プログラムによる運動機能の効果を，**高橋典子氏（身体教育医学研究所うんなん）**は，住民ボランティアによる運動普及活動時の転倒予防対策―ヒヤリ・ハット事例集をスタッフ間で共有することでリスク感性を養うことを発表した。**松崎智子氏（訪問看護ステーションルースト）**は，訪問看護（在宅）において，安全かつ簡単に，歩行能力や転倒のリスクを測定する方法として，片足タッピングの効果を，**矢部力造氏（稲次整形外科病院）**は歩行自立の支援として事例を通して残存機能と生活環境を考慮した移動方法の選択の意義を明らかにした。

☆ポスター 2：開発　座長：朴眩泰（韓国東亜大学／国立長寿医療研究センター）

渡邉昌和氏（徳武産業株式会社）は，病院内の転倒予防のための履物として開発したリハビリシューズの成果を発表した。**正源寺美穂氏（金沢大学）**は，高齢者の在宅生活を支援する生活行動センシング（室内の無線扉センサ・環境センサ・電源タップなど）モデルを開発し，縦断的検討による冬季３か月間の心身機能の推移を発表した。**吉田太樹氏（東京湾岸リハビリテーション病院）**は，ブレーキのかけ忘れやフットサポートのあげ忘れを自動的に声掛けする声掛け機能付き車いすを開発し，有用性について発表した。**井上誠氏（県立広島大学）**は，ベッド周囲でも着用可能な転倒予防靴下の効果について，**新宅光男氏（コーポレーションパールスター）**は，異業種多職種連携による地域活性化として「転倒予防の発信地あきつ町」の取り組みの発表を行った。

☆ポスター 3：転倒を来しやすい疾患とその対策　座長：立入克敏（たちいり整形外科）

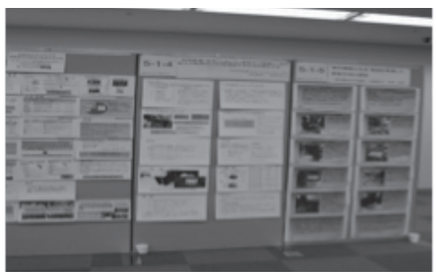
高柳直人氏（花王株式会社東京研究所）は転倒経験者と非経験者における歩容の違いに関して膝関節モーメントに違いがあることを発表した。**荏原太氏（高田中央病院）**は，Dual Task と Feed Back のコンセプトに基づいた安全で新しいパーキンソン病患者の転倒予防トレーニングの効果を発表した。**橋間葵氏（おそえがわ脳神経内科）**は，神経変性疾患患者に対して複数の心身機能検査の評価を行った結果，転倒の予測は複数の因子で明らかにすることの必要性を発表した。**柴直美氏（介護老人保健施設みどり苑）**は，「認知症専門棟におけるひやりはっとへの対策―繰り返さない為の取り組み」として転倒現場にひやりはっと報告書を張り出すなどでスタッフの注意喚起を促すことで効果があったことを発表した。

☆ポスター 4：転倒予防チーム　座長：内田泰彦（健康リハビリテーション内田病院）

桑垣佳苗氏（埼玉慈恵病院）は，理学療法士の専門性を活かし動作分析による転倒予防介入後 3 年で転倒率が 10% 減少したことを報告した。**近藤公則氏（立川メディカルセンター悠遊健康村病院）**は，転倒転落が多い時間帯から対応策を実行させた結果転倒件数（累積データ）が 24 名から 11 名まで減少したことを発表した。**遠藤裕佳子氏（大原綜合病院）**は，せん妄対策にて転倒転落予防を試みた TQM 活動について転倒発生率の減少と職員の転倒予防意識が一層高まった点を報告した。**岡田康佑氏（東海記念病院）**は東海記念病院における転倒発生の状況を詳細に分析，入院から 10 日間が最も多く転倒が発生したことに着目し職員にも意識づけがなされたことを報告した。

転倒予防をチームで取り組むことによりすばらしい結果が得られた発表であった。組織のトップがチームに参加すればなお良い効果が生まれるのではないだろうかと締めくくられた。

☆ポスター 5：回復期病棟における転倒予防介入　座長：藤末洋（藤末医院／川西市医師会）



大前圭裕氏（千葉中央メディカルセンター）は，回復期病棟における歩行自立基準使用に関することで歩行状況が改善することを，**市川愛氏（東京湾岸リハビリテーション病院）**は，回復期リハビリテーション病棟における新たな転倒転落評価ツールの作成と導入によりスタッフの安全対策の意識の向上がみられたことを報告した。**藤木潤氏（蒲田リハビリテーション病院）**は回復期リハビリテーション病院における 1 回転倒者と複数回転倒者との比較をし，複数回転倒者は転倒時 FIM 運動項目が有意に低いことを報告した。**林節也氏（岩砂病院・岩砂マタニティ）**は，回復期リハビリテーション病棟における転倒転落事象と FIM および転倒アセスメントの関係性について発表した。

☆ポスター 6：スタッフ教育と連携　座長：岡山慶子（朝日エルグループ会長）

井上靖悟氏（東京湾岸リハビリテーション病院）は，新人理学療法士に対する転倒予防の教育研修プログラムの効果を，**阿部邦彦氏（LC ウェルネス）**は，転倒による中等度・重度外傷のない事業所のスタッフの転倒予防に関するリスク意識とケア場面から，リスク管理，観察，情報共有の方法を検討し，意識が高いことを報告した。**山崎京子氏（千葉東病院）**は，転倒後の転倒転落ラウンドにおける環境チェックシートの効果を，**伊藤保氏（PD Japan, OpEx オフィス）**は，ポジティブデビアンス（良い逸脱者による片隅の成功）による転倒予防の可能性としてスタッフの行動や関係性の変容が求められていることを発表した。

いずれも事例を通しての観察を統計分析，質的分析を行ったものであった。転倒リスクの低減につながる教育の在り方について活発な質疑応答が行われた。特に教育する側，受ける側との連携，両者のコミュニケーションの取り方について，発表者同士の意見交換があり，さらなる今後の研究が期待されるセッションとなった。

☆ポスター 7：リスクアセスメント　座長：川村治子（杏林大学）

後藤保子氏（千葉東病院）は，1 年間の転倒転落インシデント報告を分析し，ベッドサイドでの転倒が多いことを発表した。**中村直子氏（大阪市立総合医療センター）**は，離床センサー装着基準フローシートつき転倒転落アセスメントスコアシートの転倒予防効果を，**渡辺哲陽氏（金沢大学）**は，加速度データに基づく若年健常群の多重課題条件化における転倒リスク評価を，**福岡敦子氏（大阪市立総合医療センター）**は転倒転落アセスメントシートを活用したせん妄予防対策の取り組みと今後の課題を発表した。

●企業・書籍展示

●まとめ

シンポジウムやワークショップでは第一線の研究者・臨床家・実践家の発表であり，転倒に関する最新の専門知識を得ることができた。会場では保健・医療・福祉・工学，産業などさまざまな職種の参加者による活発かつ積極的な意見交換が行われた。最新の研究でかなりエビデンスが得られた転倒予防と運動療法以外にも多職種連携によるチームアプローチ，転倒リスクアセスメント，転倒予防に関するハードの側面などもさまざまな取り組みによる知見や専門知識を得ることができた。転倒予防の実践や研究には難解な側面は多いが，それぞれの職種や立場，領域における方向性が明らかになり，本学術集会のテーマどおり転倒予防の未来をつかむことができたと言える。

第 2 回学術集会プログラム

開催：2015 年 10 月 10 日（土）11 日（日）京都

【特別講演】座長：萩野 浩（鳥取大学医学部保健学科 教授 / 附属病院リハビリテーション部 部長）
井上 八千代（舞踊家 京舞井上流五世家元）「京舞における所作と身体」

【シンポジウム】「転倒を来す疾患・障害の臨床像と転倒予防対策」
座長：奥泉 宏康（長野県東御市立みまき温泉診療所 所長）
鈴木 隆雄（桜美林大学加齢・発達研究所 所長 大学院教授 / 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 総長特任補佐）

1. 特発性正常圧水頭症の症状と治療：わが国の多施設共同ランダム化比較試験
石川 正恒（洛和会音羽病院正常圧水頭症センター 所長）
2. 前立腺疾患と転倒
赤倉 功一郎（JCHO 東京新宿メディカルセンター 副院長・泌尿器科部長）
3. 神経難病と転倒―特に進行核上性麻痺（progressive supranuclear palsy: PSP）を中心に―
饗場 郁子（国立病院機構東名古屋病院神経内科 リハビリテーション部長）
4. 転倒に注意すべき薬剤―睡眠薬を中心として―
大谷 道輝（東京逓信病院薬剤部 副薬剤部長）
5. 糖尿病と転倒
荒木 厚（東京都健康長寿医療センター糖尿病・代謝・内分泌内科 内科総括部長）
6. 栄養と転倒
山田 実（筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻 准教授）

【パネルディスカッション - 1】「認知症高齢者の転倒予防」
座長：島田 裕之（国立研究開発法人国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター 部長）
鈴木 みずえ（浜松医科大学医学部看護学科 教授，日本転倒予防学会 副理事長）

1. 急性期病院における認知症高齢者の転倒予防に関する看護アプローチ
髙原 昭（北播磨総合医療センター認知症看護認定看護師 副課長）
2. 高齢者施設における認知症高齢者の転倒・転落事故の特徴と予防
河野 禎之（筑波大学ダイバーシティ推進室 助教）
3. 認知症の転倒と日常生活活動・行動障害との関係―転倒の予測と介入方法について―
岡村 太郎（千葉県立保健医療大学健康科学部リハビリテーション学科作業療法専攻 教授）
4. 介護施設における認知症高齢者の排泄に関連する転倒予防
平松 知子（金沢医科大学看護学部老年看護学 教授）
5. 認知症高齢者の転倒を防ぐセーフティマネジメント
小松 泰喜（東京工科大学医療保健学部理学療法学科 教授）

【パネルディスカッション - 2】「転倒予防のためのハード開発」
座長：上岡 洋晴（東京農業大学地域環境科学部身体教育学研究室 教授）
山本 創太（芝浦工業大学工学部機械機能工学科 准教授）

1. ヒッププロテクタの力学性能評価システムの開発
田中 英一（東海職業能力開発大学校 校長 / 名古屋大学 名誉教授）
2. 滑り転倒事故は自己責任か？ バリアフリー新法改訂！ 床面滑り抵抗係数 (C.S.R) が転倒事故を変える！
清水 雅雄（防滑業振興協会 理事長）
3. 医療従事者の経験則を考慮した知的な転倒予防システム
櫛田 大輔（鳥取大学大学院工学研究科情報エレクトロニクス専攻 助教）
4. つまずきによる転倒の予防を目的としたロボットの開発
高杉 紳一郎（佐賀整肢学園こども発達医療センター 副院長）

【ワークショップ】「転倒予防チームを作る」
座長：大高 洋平（慶応義塾大学医学部リハビリテーション医学教室 助教）
岡田 真平（公益財団法人身体教育医学研究所 所長）

1. 転倒予防チームを始める―急性期病院の看護師の立場から―
米山 久美子（鳥取大学医学部附属病院医療安全管理部 副看護師長）
2. 急性期病院での転倒予防対策チーム―療法士として―
平井 覚（一般財団法人永瀬会松山市民病院リハビリテーション科 副室長）
3. チームで取り組む回復期リハ病棟での転倒転落対策
松浦 大輔 (医療法人社団保健会東京湾岸リハビリテーション病院リハビリテーション科 診療部長）
4. 認知症高齢者が，立つこと，転ぶこと―当施設におけるヒヤリハット検証と認知症の方への関わりについて―
及川 智司（岩手県社会福祉法人清智会介護老人保健施設北上きぼう苑 介護課長）
5. 地域ぐるみの運動普及を通じた転倒・介護予防
北湯口 純（雲南市立身体教育医学研究所うんなん 主任研究員）

【ランチョンセミナー -1】…共催：中外製薬株式会社，大正富山医薬品株式会社
「転倒予防とビタミン D」
座長：原田 敦（国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 病院長）
演者：鈴木 隆雄（桜美林大学加齢・発達研究所所長大学院教授 / 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 総長特任補佐）

【ランチョンセミナー -2】…共催：エーザイ株式会社
「骨粗鬆症診療における転倒予防の重要性」
座長 : 武藤 芳照（学校法人日本体育大学日体大総合研究所 所長 / 日本体育大学保健医療学部 教授，日本転倒予防学会 理事長）
演者 : 日高 滋紀（医療法人日高整形外科病院 院長）

【スポンサードセミナー】…共催：MSD 株式会社
「不眠症と転倒・骨折」
座長：高杉 紳一郎（佐賀整肢学園こども発達医療センター 副院長）

1. 高齢者の不眠・転倒・骨折
宗圓 聰（近畿大学医学部奈良病院整形外科・リウマチ科 教授）
2. 不眠症治療とオレキシン受容体拮抗薬
伊藤 洋（東京慈恵会医科大学葛飾医療センター 院長，日本睡眠学会 理事長）

【イブニングセミナー】10 月 10 日（土）開催…共催：旭化成ファーマ株式会社
「多職種で取り組む転倒・骨折予防」
座長：橋口 知（鹿児島大学教育学部健康教育講座 教授）

1. 認知症高齢者の転倒予防
鈴木 みずえ（浜松医科大学医学部看護学科 教授，日本転倒予防学会 副理事長）
2. 大腿骨近位部骨折に対する多職種連携アプローチ
澤口 毅（富山市民病院 副院長 整形外科部長 / 金沢大学医学部整形外科 臨床教授）

【一般口演】34 題　**【ポスター】**30 題